テンサイ褐斑病の薬剤を中心とした効果的防除法

概　要 Abstract

テンサイ褐斑病は、葉が枯れ、糖量の低下を引き起こす重大な病気で、近年多発傾向にあります。これまでは、発病株率が50％に達した時点で薬剤の散布を開始する防除法が指導されてきましたが、今回これを見直し、新しい防除対策を示しました。

褐斑病無防除　　防除
9月上旬の発病状況

成　果 Results

1. 初発直後までに薬剤散布を始めましょう。

抵抗性「強」品種における防除効果
（○：効果あり、×：効果なし）

年次（平成）	散布開始時期 初発前	初発直後	発病株率50％到達時
25	○	○	未実施
26	○	未実施	×
27	○	○	×

2. 病原菌接種による甚発生条件の場合、薬剤の残効期間は5～9日ですが、年次や気象条件で変わります。

年次(平成)	薬剤	残効期間
25･26	マンゼブ水和剤、DMI	7～9日
	カスガマイシン･銅水和剤	5～6日
27	マンゼブ水和剤	14～16日
（低温）	フェンブコナゾール乳剤	10～13日
28	マンゼブ水和剤	5～6日
（多雨）	フェンブコナゾール乳剤	5～6日

抵抗性「弱」品種供試

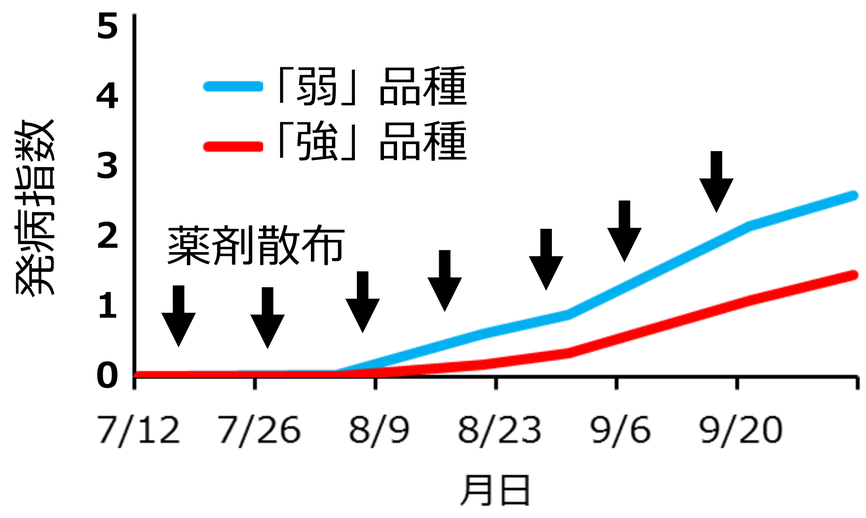
カスガマイシン・銅水和剤は他の薬剤よりも残効期間が短いです。

3. ただし、一般的な現地の圃場では、薬剤の散布間隔14日以下で病気をほぼ抑えることができます。

散布間隔	少発生圃場（%）	全圃場数
14日以下	88.2	17
15～20日	50.0	8
21日以上	36.4	11

オホーツク管内で調査

4. 薬剤と合わせて、可能な限り褐斑病抵抗性「強」の品種を使いましょう。



テンサイ褐斑病の防除対策

項目	対策	留意点
散布開始	初発直後まで	地区の平年初発期や発生予察情報を参考にし、散布時期を決定する。ただし、それ以前に発病を確認した場合は直ちに散布を開始する。
散布間隔	14日以下	高温多湿の気象条件下（最低気温が高く多雨）では平年より発病の進展が急激なので、散布間隔を10日以下にする。通常の条件下でも、14日を超えると防除効果が劣る。
品種	可能な限り抵抗性「強」品種	抵抗性が強いほど初発が遅い傾向が認められ、同一防除条件下では、「強」品種は「弱」品種より発病の進展が遅い。

薬剤の選択に留意してください。
8月下旬で薬剤散布を終了すると、その後の発病が急激に進展する場合が多いです。

普　及 Dissemination

- テンサイ褐斑病の防除対策として活用してください。
- 本試験は褐斑病菌接種の条件下で実施しました。

連絡先 Contact

北見農業試験場
研究部 生産環境グループ
0157－47－2146
kitami-agri@hro.or.jp